

クビアカツヤカミキリ

クビアカツヤカミキリは、2012年に愛知県に侵入し、その後、栃木県、群馬県、埼玉県、東京都、愛知県、大阪府、徳島県、和歌山県、奈良県、三重県、茨城県、神奈川県及び兵庫県で発生し、現在13都府県で発生が確認されている。

本種は、もともと中国及びその周辺に生息していたが、木の内部に穿孔し蛹室を形成するため、国際的な木材の流通とともに生息地を広げ、ドイツやイタリア等でも侵入が確認されている。

1. 形態

成虫の体長は、28～37mm。

通常、前胸背板(首の部分)は明赤色で4つの小突起があり両側部の突起は側方に突出している。

前胸背板以外は光沢のある黒色を呈し、触角と脚部は暗青灰色である。



成虫(植物防疫所原図)

2. 生態及び被害

樹木内部で蛹から羽化した成虫が6月下旬から8月上旬に出現し、交尾・産卵する。

野外での成虫の寿命は概ね1カ月程度であり、成虫での越冬はしない。

産卵は幹や樹皮の割れ目に行い、8～9日後には卵が孵化し、幼虫が樹木内部に食入する。

幼虫期間は2～3年、春～初夏の摂食が盛んであり、この時期にフラス(糞と木屑が混ざったもの)が多く見られる。

主にサクラ、ウメ、モモなどのバラ科樹木を加害するほか、海外では、カキ、ザクロ、オリーブ、ヤナギ、コナラ、ポプラなど多くの樹種に寄生することが報告されている。

果実は加害しないが、多数のカミキリムシ幼虫が寄生し食害量が多くなると、樹木が衰弱し枯死する。

3. 防除対策

他の樹木への分散防止のため、フラスの見られた樹木を中心に羽化期(6～8月)の前にネット(容易に切れない目合4mm以下)を樹幹に巻き付ける。

この際、幹とネットの間が密着していると、幼虫や成虫が食い破るので、密着させないように巻く。

また、定期的に園内を見回り、ネット内の成虫は見つけ次第ハンマーで叩くなどして殺虫し、ネットの外の成虫は捕殺する。

大量に太く連なったフラスが排出されている樹木を見つけた場合には、幼虫がいる可能性が高いので針金や千枚通しなどで食入孔からフラスをかき出し、クビアカツヤカミキリまたはカミキリ類に登録のある薬剤で防除するか、幼虫を針金等で刺殺する。



枝に溜まったフラス(植物防疫所原図)



幼虫による食害(植物防疫所原図)